昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要　Vol. 8（1999）

# 鳥居龍藏の沖縄調査
## ――調査記録などの分析を通して――

田畑　久夫

# Field Survey in Okinawa by Torii Ryuzo
## ――Analysis of Survey Record――

Hisao Tabata

Torii Ryozo, Anthropologist and Archaeologist, was a pioneer in interdisciplinary studies on the related subjects, in Japan. His studies were based on the materials collected from field surveys not only within Japan but also its peripheral areas and his theories were derived from such materials.

His survey in Okinawa was one of his remarkable field surveys. There, he could get a clue to reveal the root of "Japanese proper" that was one of his projects. That is to say, by the field survey in Okinawa, he became confident of the theory that Ainus were the aborigines on the Japanese islands and "Japanese proper" came down to the south via the Korean Peninsula in the Yayoi period.

After that, he started his field surveys in the Continent of East Asia on a full scale to establish this theory more firmly.

## 1. 問題の所在

鳥居龍藏は、拙著[1]・拙論[2]などにおいても度々繰り返して論を展開してきたように、専門とする人類学および考古学を中心に歴史学・地理学などの関連諸分野の学際的研究（interdiplinaly studies）を目ざした、わが国における先駆者の一人といえよう。それでは、何故、鳥居龍藏が、かように日本における学際的研究の先駆者となりえたのだろうか。かかる点に関しては、鳥居龍藏の学問形成の時期、つまり19世紀後半から20世紀初頭にかけての時代が、その鍵を握っていると思われる[3]。最初に、この点について検討していくことにする。というのは、かかる点を解明することによって、鳥居龍藏の日本国内を含む東アジア諸国・地域に関する50年以上にも及ぶフィールドサーヴェイを、非常に精力的に実施した目的の一端でも明らかにできるのではないか、と思われるからである。

鳥居龍藏は、上述の19世紀後半から20世紀初頭に、青年期および壮年期の大半を過した。その当時、学問・文化の中心といえばヨーロッパであった。すなわち、ヨーロッパにおいては、自然・人文の諸科学が多方面にわたって勃興し、隆盛を極めていた。その原動力の端緒となったのは、市民革命と産業革命であったといえよう。つまり、前者の市民革命は、従来の絶対王制に代表される非常に特権的な政治体制に代って、政治的民主主義の原則を樹立するとともに、資本主義的発展の基礎的条件をつくり出した[4]。また、それに続く、後者の産業革命は、周知のよ

うに、イギリスにおいて開始された。その始まりは、新興の木綿工業からであった。そこでは、紡績機や織布機が新しく発明され、蒸気機関が主要な動力源として実用化された。そして、それによる本格的な操業が実施されることになった[5]。

かような転換期において、学問の世界でも、19世紀に入るとロマン主義が台頭してきた[6]。つまり、ロマン主義は、歴史的な考え方を進め、歴史学および民俗学をとくに発展させた[7]。このような新潮流も勃興してきたが、当時における学問分野の特徴といえば、現在のように諸科学分野が細分化・専門化されず、互いに補完し合い、そのことによって巨視的な世界観や人類(間)像の形成を試みたこと、換言すれば、前掲の拙著・拙論などでも既に指摘した学際的研究が多数みられるという点であろう。

鳥居龍藏は、かような学問的傾向を有するヨーロッパにおける学問的成果を、主として独力・独学で学習した豊富な語学力を駆使して、吸収していったのである。したがって、本稿がとりあげ、論を展開していく沖縄に関しても、短期間というごく限定された期日でしかも訪問した回数も2回のみとけっして多くないが、専門とする考古学・人類学を主体にその関連諸分野にも及ぶ学際的研究を実施したのであった。

## 2. 沖縄調査の動機

鳥居龍藏は、沖縄には既述のように2回出かけ、フィールドサーヴェイを行なった。とはいっても、初回の調査は、明治29年(1896)から明治33年[8](1900)にかけて合計4回実施された台湾調査の第1回目の帰路に短期間沖縄に滞在し、風俗・習慣を調査したという程度であった[9]。しかしながら、かように短期間の調査[10]であったが、沖縄に関心をもち、調査することにしたのは次のような理由からであった[11]。

すなわち、鳥居龍藏は、最初のフィールドサーヴェイであった遼東半島調査（明治28年、1895）を無事終了し帰国した後、東京麻布の某所で、その調査報告を中心とする講演を行なった。その講演を聴講していた東京帝國大學総長渡邊洪基が、講演終了後、日本人類学調査としてもっとも必要な場所は、第1に沖縄、それから台湾・朝鮮[12]である。今後、これらの3ヶ所を調査する必要があると述べた。鳥居は、この渡邊洪基の助言に対して、将来、これらの諸地域に関してはかならず調査します、と返答したことがあった。事実、その後、これらの3地域に関しては、鳥居は実際に現地に出かけ、詳細なフィールドサーヴェイを行なった。

しかし、直接的には上述したように、渡邊洪基からの助言により沖縄の調査を実施することになったといえるが、渡邊の指摘を待つまでもなく、鳥居龍藏は、沖縄に関しては非常に関心を有していた。すなわち、鳥居が理科大學人類学教室の標本整理係[13]に任命されて以来、とくに懇意となっていた、南方諸島の植物分類学が専門で、その権威者でもあった田代安定から、種々と沖縄について有益なる教示を得ていたからであった。また、田代の紹介で、宮古島より請願のために上京した2名の島人と知友となり、これら両氏より主として宮古島に関する土俗[14]上の知識を入手したことなどによった[15]。

以上論じたように、知友となっていた田代安定は、その後、台北に台湾総督府が設置されると、そこの技師に任命され、広く台湾全島の植物に関して調査・研究をしていた。そこで、第1回台湾調査においては、とくに台湾東部の少数民族調査には現地の地理に詳しい田代に同行を求めたのであった。田代からは、台湾調査中に、沖縄本島はいうに及ばず、宮古島・八重山群島などの植物に関する専門的な知識だけではなく、そこに居住する島民の宗教・土俗などを中心と

する伝統的な風俗・習慣に関しても、情報を得るところが大であった。そこで、既述のように、台湾調査の帰路、沖縄本島に立ち寄り、同島師範学校博物学教諭黒岩恒方に滞在して、数日間調査を試みた。

かくして、鳥居龍藏は、渡邊洪基の助言および田代安定との知遇などから沖縄に関心をもつようになり、フィールドサーヴェイを本格的に実施しようと決心するのである。しかし、このような鳥居の希望がかなえられるのは、およそ8年後の明治37年（1904）のことであった[16]。それまでに、鳥居は、北は千島列島北部（明治32年、1899）、西は遼東半島（明治28年、1895）南は台湾（明治29年～33年、1896～1900）、西南中国（明治35・36年、1902·03）と日本列島周辺地域を北から南まで一通りフィールドサーヴェイした後、日本列島最南端に位置する沖縄を調査することになったのである[17]。

鳥居龍藏による本格的な沖縄調査は、前述したように、明治37（1904）に開始された（以降、この調査を第2回沖縄調査と称す）。この調査に先立つ第1回沖縄調査は、この点も既に指摘したように、東京帝國大學総長渡邊洪基および植物分類学者田代安定の両先生からの助言などによって実施されたのと同様に、第2回沖縄調査に関しても、沖縄訪問については、以下で論じるような直接の動機が存在した。

すなわち、鳥居龍藏は、第2回沖縄調査に出かける前年に当たる明治36年ごろ、東京帝國大學文科大學で上田萬年の講義に出席したり、チエンバレイン(Basil Hall Chamberlain, 1850－1935)の著書[18]などを読破して、言語学に非常に深い関心を有していたときであった。とくに、鳥居は、チエンバレンの見解には非常に注目した[19]。

すなわち、チエンバレンによれば、言語上からも日本語と琉球語はまったく一致している。日本語と琉球語との関係は、スペイン語とイタリア語との関係のようなものである。ということは、かりに日・琉両語の祖語のようなものが存在したとすれば、日本語はその祖語の一部分を残しており、同様に琉球語もその一部を残しているであろうと主張したのであった。そして、動詞の転化に代表されるように、今日の日本語が古代の日本語を代表しているというよりも、むしろ逆に、琉球語の方が日本の古語を代表している場合が多い、と強調したのであった。

上述の上田萬年の講義を鳥居龍藏と同様に聴講していたのが伊波普猷[20]であった。鳥居と懇意となった伊波は、度々鳥居の下宿先にも遊びに来るほどの間柄になった。そうこうしている間に、伊波が自分は近々沖縄に短期間帰省するが、私と共に沖縄に行き、沖縄の人類学的調査をしてみてはどうか、という話をもちかけた。鳥居はそのとき、上田萬年先生の講義やチエンバレンの著書などから大変言語学に興味をもっていたときであり、また元来人類学にも関心をもっていた。そこで、鳥居は、直ちに沖縄に出かける決心をした。

かかる鳥居の沖縄訪問が決定すると、そのことを聞き及んだ上田萬年先生は、沖縄の言語・民謡・土俗などの他の取り調べという名目で、旅費の一部の援助を申し出られた。さらに、伊波普猷とともに、尚侯爵家[21]が所有する船舶に無料で乗船することを許可してもらった。出発は、明治37年6月中旬であった。

なお、出発の際に、沖縄諸島の言葉や民謡などを吹き入れる目的で、当時としては非常に高価であった蠟管蓄音機1台を某商店から借用した。フィールドサーヴェイにおいて、蓄音機を使用して、資料の収集に当ったのは鳥居龍藏が最初であると、自負しているほど、後述するように、この蓄音機はその威力を発揮した。

### 3. 沖縄調査のコースと調査内容

前章でも指摘したように、第１回沖縄調査は、台湾調査の帰路においてごく短期間滞在して行なっただけであった。それ故、本格的なフィールドサーヴェイを実施することができなかった。しかしながら、台湾調査中において、現地で同行を願った田代安定から直接具体的に沖縄調査の話を数多く聞き及んでいたので、滞在中は楽しく調査を実施することができた。かように、鳥居龍藏が心地好く調査を行なえたのは、沖縄に出かけた経験をもたなかったが、宮古島の土俗に関する論攷[22]を作成していたことも大いに関係があるように思われる。かかる論攷を作成するに用いた主たる資料は、既述したように、田代安定の紹介で知友となった宮古島の島民2名から送ってもらったものであった。以下では、鳥居龍藏の沖縄調査の関心が、どのようなものであったかを知る有力な手がかりを得るために、かかる論攷を多少冗長ではあるが紹介しておくことにする[23]。

鳥居龍藏がとくに沖縄に注目したのは、小竹を切って管形の珠とし、これを連ねて頸部にぶらさげるという風習であった。かような風習は、沖縄諸島全域にみられたが、とくに宮古島においては、かかる風習がもっともよく残っていることが、宮古島の島民が送付してくれた資料などを検討してみると判明したからである。宮古島では、このような管珠を「竹珠」あるいは「はけだま」と呼んでいる。後者の「はけだま」を漢字で表記すると「掛珠」となる。このように漢字で表記できるのは、宮古島方言の習慣によるものであるという[24]。

この「竹珠」あるいは「はけだま」を頸部からぶらさげるという習慣は、前述したように、男性にはまったくみられず女性のみの風習となっている。しかも、女性であれば少女から高齢者まですべての女性がしていることが大きな特徴となっている。かかる「竹珠」の製法といえば、内地に生えている矢竹ほどの大きさの小竹を切り出し、それを3寸位の長さに切り、真苧を糸として、それに通す。これを連ねた「竹珠」の長さは、頸部からその先端が胸部にまで達するのであるから、約3尺ほどになる。

現在、宮古島では「竹珠」といえば、上述したようにたんに小竹の管珠のみを頸部すなわち首からぶらさげているもののことである。しかし、以前においては、「竹珠」の間に曲玉を付けたのが一般的であった。ところが、近年、内地から来島した多くの旅人などがその曲玉を多数持ち帰ってしまったことから、現在では、島中においては曲玉が極端に不足し、ついには現在のように竹管のみをぶらさげているという状態となっている[25]。

というのは、「竹珠」の竹管の間に付けられていた曲玉は、かつて内地人の手によって沖縄にもたらされたものではなく、すべて以前地中から掘り出されたものであったからである。また、「竹珠」を頸部からぶらさげるという風習は、沖縄諸島の中でも宮古島にもっとも古くから存在したものであるといわれている。かような風習が沖縄諸島にみられるのは、女性の装飾のためであることは明白といえるが、「竹珠」が反射して出す光が流行病とか悪魔を封じる効果があるとされ、一種の御守のように使用されることにもよる。

さらに、「竹珠」に付けられている曲玉については、その原因がどうであれ、内地には曲玉と共に出土する管玉が、宮古島を筆頭に沖縄諸島全域においてまったく出土しないことは、非常に注目すべき事実であると思われる。かかる点に関して、鳥居龍藏は、沖縄では古昔も現今のように、竹管をもって管玉と同様の装飾品としてきたために、新たに他の材料を用いて管形の玉を製作する必要がなかったのではないか、と

推察している。それ故、内地の古墳などより出土する管珠も、その起源は恐らく「竹珠」にあるのではないかと考えられるのである。そのうえ、曲玉の色はすべて濃緑色を呈しているが、かかる濃緑色は、管玉の色とまったく同一である点も、両者の起源を考える場合興味ある一致点といえる。

かように、「竹珠」の事例に代表されるように、鳥居龍藏は沖縄諸島の土俗に対して、実際に現地に出かける以前から非常に関心を有していたのである。したがって、機会が存在すれば現地の沖縄を訪問することを強く希望していたように思われる。かかる点こそが、拙論[26]などでも度々指摘しているように、鳥居のフィールドサーヴェイを重視する実証主義的な研究態度のあらわれであるといえよう。

第2回沖縄調査は、上述したように、上田萬年の言語学の講義を聴講していた関係から懇意となった伊波普猷の帰省に同行したものであった。鳥居・伊波の両名は、沖縄の玄関港とでも称すべき那覇に船で到着すると、直ちに首里にある伊波の実家に直行した。同家では数日間滞在することになった。その間、首里の古城、市内見物をはじめ、沖縄本島各地の風俗や古城などの見学・調査に没頭した。これらの見学・調査の中では、とくに現地でノロクモイと呼ばれているシャーマンの巫女（鳥居は「ノロクモイ巫」と称している）に注目し、その巫首である女性の写真などを多数撮影した[27]。また、毎晩劇場に通い、沖縄演劇を鑑賞したり、沖縄民謡などを聞くなどして、沖縄の民俗芸能に関しても知識を吸収した。

かように、沖縄本島において、滞在日数は短期間であったが、非常に精力的に活動を行なった。考古学的な発見・調査に関しても、同様に多大の成果をあげた。すなわち、はじめて上陸した那覇港の海底の一部に、中国の宋時代の青磁の破片が多量に沈没していることを聞き、そこに出かけ、多数の陶片を採集した。この場所に、このように青磁の破片が残存しているのは、宋船が貿易のために来島したが、難破したためであろうと推定される。鳥居龍藏は、これらの遺物が考古学上はもとより、沖縄と宋との貿易史を考察するうえからも、非常に貴重な資料であると考えた。

さらに、那覇においては貝塚も発見した[28]。貝塚では貝殻とともに石器や土器が出土した。鳥居は、とくに土器に注目した[29]。すなわち、土器の様式は明白に縄文土器で、しかも薄手式[30]のものであった。さらに、これらの土器には山型をした把手が付いていた。これらの特色を総合的に判断すると、内地の九州・四国の両地方から出土することの多い土器と大変類似している。このことから、かかる貝塚に代表される沖縄本島の石器時代の遺跡は、九州・四国地方の遺跡と連続していることが判明したのである。つまり、「日本内地の石器時代遺跡は、沖縄諸島にまで延長し、これがためにまた同一民族の分布していたことがわかったのである。[31]」と、石器時代の日本内地に居住していた民族集団と当時沖縄に居住していた集団は同一民族であるという結論に達したのであった。かかる点は、鳥居龍藏の人類学上の主要な業績の1つと看做されるので、後章において補足説明および検討を加えることにする。

那覇での貝塚の調査を終了すると、本島各地の貝塚を発見・調査した[32]。これらの貝塚の発見・調査により、鳥居龍藏は、沖縄本島の貝塚形成時つまり石器時代が、沖縄諸島に連続する台湾の石器時代と比較すると、出土する石器は勿論のこと、骨器・土器など他の遺物に関しても、まったく類似点を有しないことが判明した。すなわち、沖縄本島の石器時代の住民と台湾の石器時代の住民は別系統の集団であることを示

していると思われたのである。

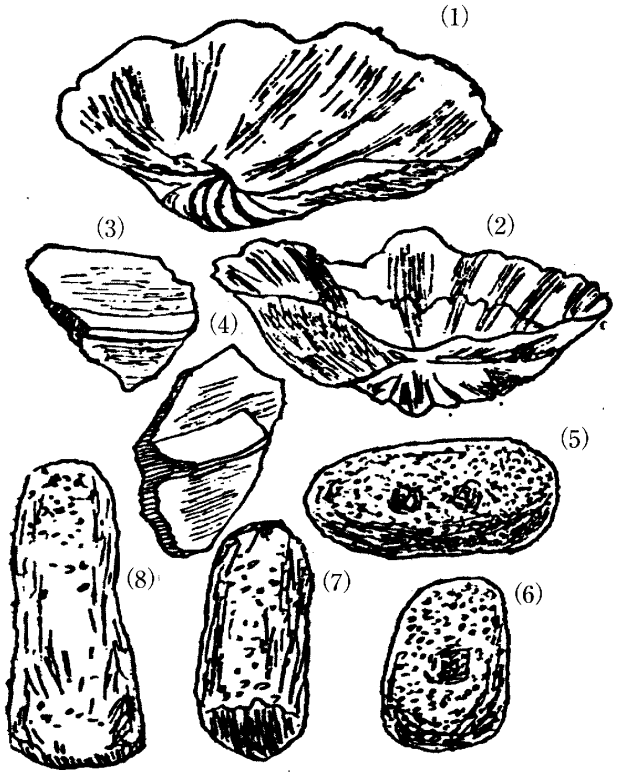
以上のように、沖縄本島での調査を無事終了することができたので、世話になった伊波普猷と別れ、宮古島に向った。宮古島では磨製石器を採集するなどの考古学的調査、「ノロクモイ巫」をはじめとする土俗や言語調査などを集中的に実施すると同時に、蓄音機に民謡を多数収録した。宮古島での滞在はわずか数日間であった。

次の調査地は、八重山本島（石垣島）であった。八重山本島は、沖縄諸島の中でも民謡の宝庫であって、歌手の女性も多い。鳥居龍藏は、一晩声自慢の女性たちに民謡を歌ってもらい、それを蓄音機に収めた。また、この島にも「ノロクモイ巫」による宗教活動が盛んにみられたので、それについても調査をしたり、島の種々の風俗・習慣にも興味をもち、資料を収集した。そして、それらの風俗・習慣を日本内地のものと比較・検討するなどを試みた。さらに、以下にみられるように、沖縄本島同様に八重山本島においても、考古学的な調査に従事した。八重山本島においても、2ヶ所貝塚が存在する。川平村字獅子森と四ヶ村（現石垣市内）西端である。前者の貝塚を主体とする遺跡は、明治36年（1903）の大雨後、丘陵が崩壊し露出し、そこに貝塚が出現したものである。かように、八重山本島においても貝塚が存在するが、この島には当時マラリアがみられるという理由から、内地からの研究者が来島して、発掘調査に従事するということがなかった[33]。

川平村字獅子森の貝塚を主体とする遺跡は、川平村を去ること西数町で、非常に狭い半島の先端の小丘陵上に位置している。この小丘陵は、サンゴ礁の地層から形成されており、丘陵は独立して突出している。そのため、その形状があたかもライオンが臥するような姿を呈している。このことから、獅子森という名前が付けられたといわれている[34]。鳥居龍藏は、調査にあたって八重山役所所員崎原富原の案内を乞い、この遺跡を訪問し、調査・発掘を行なった。

その結果、この貝塚は、貝殻を多数積成しており、不完全なものであるが石器・貝器・土器を採集することができた（第1図）。その中でも、

第1図　八重山本島出土の遺物




註）(1)・(2) 貝器　(3)・(4) 土器　(5)凹み石
(6)石槌　(7)石斧　(8)石杵
出所）鳥居龍藏（1905・B）、鳥居龍藏（1975）『鳥居龍藏全集　第1巻』朝日新聞社、251ページ

土器が大変注目された。すなわち、採集した土器はすべて、沖縄本島の貝塚から出土した土器とは非常に異なり、形や様式などにおいてまったく別系統のものに分類すべきものであると考えられた。つまり、獅子森貝塚から出土した土器は、すべて素焼きであり、その色は埴色を呈し、質はあまり堅くなかった。そのため、土器面には一つも紋様がみられなかった。

さらに、かかる土器の形状に関していえば、土器の両端の側面に、先端がやや丸みを帯びた長

方形の耳型をした把手が付着されていることである。鳥居龍藏は、かようなタイプの土器を「外耳土器」と命名した。この「外耳土器」は、日本内地の貝塚などの遺跡からはまだ出土・発見されたという報告はなされていない[35]。また、沖縄本島から内地にかけて広範囲にわたって出土する石器時代の縄文土器は一点もみられなかった。同様の結果は、その後に調査・発掘を実施した四ヶ村西端の貝塚においてもみられた。すなわち、四ヶ村西端の貝塚においても「外耳土器」が出土したのである。

以上の八重山本島における貝塚を中心とした遺跡の発掘調査の結果、これら八重山本島の土器に関しては、沖縄本島の貝塚などの遺跡から出土する土器とはまったく異なる、別系統の土器が出土することが判明したのである。つまり、かかる事実を敷衍して述べれば、「日本の縄文式系の石器時代遺跡は沖縄本島（宮古島?）付近までであって八重山島付近においては、その分布が全く切断されていること[36]」が、資料的に裏付けられたといえる[37]。

それでは、これら八重山諸島の貝塚から出土した土器は、どのような系統に所属することになるのであろうか。かかる点に関しては、製作形式などから判断すると、自身が行なった台湾調査（第１回、明治30年、1896）でみた、アミ族やヤミ族が、現在でも使用している土器と大変類似しているという、注目すべき指摘を行なった[38]。しかも、八重山本島で発見された貝塚の上層部からは、これも鳥居自身が那覇港で採集した宋代の青磁と同一の陶片が出土するのである。それ故、この事実から、これらの貝塚は少なくとも宋代以前に形成されたものであることが明白となったのである[39]。

かように、鳥居龍藏は、八重山本島の貝塚での上層部より出土する青磁の破片の年代を宋代以前のものであると看做した。しかし、青磁の年代をもう少し具体的に特定できないだろうか。この点が解明されることになったのは、鳥居が沖縄調査を終了して、東京に戻ってからのことであった。すなわち、鳥居は、沖縄本島那覇港で採集した青磁の破片の一部を詳しく研究するため東京にまで持ち帰っていたのであった。そして、その破片を知友などに鑑定してもらった。その結果、これらの青磁の破片の年代は、15・16世紀のものであることが判明した。八重山本島の貝塚出土の青磁も那覇港から出土したものと同一であると考えられるので、同様にそれらも15・16世紀のものであると看做すことができる。そうであるとすれば、当時つまり15・16世紀において、八重山本島では、まだ石器時代から引き続いた原始的末期の集団が住んでいたと推定される[40]。さらに、鳥居龍藏は、推論を一歩進めて、以下にみられるような4ヶ条の理由から、貝塚を形成した集団は、現在の八重山本島に居住する集団と同一のものであるという結論に達するのである。すなわち、

（１）八重山の神話・伝説中、野蛮、未開なる話のあること。

（２）大浜村、崎原御嶽の伝説中、昔この島に鋤・鍬・鎌等の鉄器がなかったので、他より船でその物を持ち帰り、これを神として祭ってあること。

（３）外耳土器と現今神事の時用ゆる角皿すなわち杯（Tsunu-Jara）と相類似すること。

（４）この遺跡・遺物と現今八重山島民と連続があること。」[41]

なお、八重山諸島の島民の祖先は、史料的にはまったく不明であるが、石器時代の遺物・遺跡が残っていることから、彼らの祖先は、古い昔、この島に移住してきたことも明らかであるとも述べている。

かように、八重山本島の調査は多大の成果をあげた。調査が成功裡に終了すると、沖縄諸島

最南端の島与那国島に行く船便のあることを知った。そこで早速この船に便船して、与那国島に出かける決心をした。与那国島は台湾にもっとも近く、それ故、人類学上きわめて興味ある島であったからである。そのため、この島において、少なくとも数日間滞在し、詳細なフィールドサーヴェイを行ないたいという希望をもった。しかし、便乗した船の船長が、風波の関係上与那国島には長時間碇泊が不可能であり、一日だけなら碇泊することができると申し出た。

そこで、鳥居龍藏は、一日だけ島に滞在することにし、昼間は島全体の村落・家屋・住民が着用している衣服などの概略に関しての調査や、島にある横穴から出土した曲玉や管玉の見学、さらには写真撮影も行なうというように精力的に活動した。夜になると、村民を宿泊所に呼び、言語（方言）や説話などを聴取した。かように、とくに鳥居龍藏が、与那国島の言語や風俗に多大の関心を有したのは、古来よりこの島が他島と交通や往来をしたことがなかったからである。そのため、台湾にもっとも近いという地理的位置にありながら、台湾の生蕃[42]族との類似もなく、逆に沖縄諸島の住民と関係があることが明白であった。

便乗した船は翌朝与那国島を出発して、沖縄本島那覇港に向った。那覇では、再度伊波普猷の自宅に宿泊させてもらい、数日間滞在した。その間には、本島各地にみられる埋葬に使用されている洞穴の調査などに費やした。その後、東京に船で帰ってきた。

## 4. 沖縄調査の成果

鳥居龍藏の沖縄調査は、前章で詳細に論じたように、期間および訪問回数としては充分満足すべきものではなかった。しかしながら、田代安定、上田萬年、伊波普猷や友人などの援助・協力を得て、沖縄調査から得られた成果も多数存在する。以下では、これら多くのまだ多岐にわたる調査での成果の中から、とりわけ注目されるものに限定して、検討していくことにする。

鳥居龍藏は、明治29年（1896）に実施した台湾調査において、はじめた写真機を携えて現地に入った。かように、フィールドサーヴェイにおいて写真機を使用することは、人類学的なフィールドサーヴェイのみならず、他学科のフィールドサーヴェイでも類をみないことであった。しかも、鳥居自身が速成に撮影の方法を習得し、自ら写真撮影を行なったのであった。すなわち、かかる写真機で代表されるように、フィールドサーヴェイに、当時としては大変めずらしかった、新しく発明された器具や道具についても、調査上有効であると判断すれば用いるというのが、鳥居龍藏の立場であった。沖縄調査においても、かような立場が踏襲された。つまり、沖縄調査においても、写真機は勿論のこと既述したように臘管蓄音機を一台現地に持ち込んだ。このように、蓄音機をフィールドサーヴェイに直接導入したのは、写真機同様、鳥居が最初であった。

沖縄調査においては、この蓄音機が大きな威力を発揮することになった。かかる点は、民謡や方言を主体とした言語などの調査に関しては、ノートなどに書き留め記録するだけでは不充分で、音声も同時に採集する必要を痛感していたからであろう[43]。このように、鳥居龍藏が写真機・蓄音機などを逸早くフィールドサーヴェイに導入することになったのは、鳥居が多くのヨーロッパの語学を勉強し、マスターしていたために、ヨーロッパの文献資料から近代的なフィールドサーヴェイの方法を学習しているからであると推定できる。かかる点に関しては、フィールドサーヴェイを重視する研究者が、先行業績などの文献研究を行なわないとはいわないが、軽んじる傾向があり、一方逆に、文献研究を重

視している研究者が、フィールドを軽視する傾向がみられる現在こそ、鳥居龍藏が行なったフィールドサーヴェイの原点とでも称すべきものに帰る必要があるのではなかろうか。

以上論じたように、沖縄調査においては蠟管蓄音機に多くの資料を収録した。帰京後蓄音機の蝋管は恩師坪井正五郎によって、音楽の専門家に民謡の歌曲の旋律の研究を依頼した。ところが、残念なことに大正12年（1923）に発生した関東大震災のため、これらの曲を収録した蠟管が消失してしまった[44]。

鳥居龍藏は、沖縄の先住民族に関しても非常な関心を有していた。理由は、恩師坪井正五郎が日本民族の祖先をアイヌの伝説上の人物コロボックルと看做していたため[45]、鳥居を北千島に出張させ、自説の補強のためその証拠を収集させたことに起因していると推定できる。

以上のように、鳥居龍藏は、恩師坪井正五郎がアイヌ＝コロボックル論争の一方の旗手として活躍していたことから、日本民族の起源にも関心をもつようになった。その中でもとくに沖縄の先住民族への関心は、既に指摘したように、チエンバレインの著作の影響が大であると思われる。かかる点を検討していくことにする。

チエンバレインは、次のように考えていた。すなわち、体格に関していえば、沖縄人は日本の内地人と同一の体型をもっており、両者は共にモンゴリアン（蒙古人種）に所属している。それ故、両者の祖先は、共に朝鮮海峡（西水道）から対馬を経由して日本にやって来た。ここで二派に分かれ、一方は九州に、他方は再度海を渡って南方に向った。この南方に分派したのが、現在の沖縄人の祖先であると主張した。また、かかる事実は、その地理学的位置、伝説、言語上の類似などからも証明されるとしたのである[46]。

沖縄人はモンゴリアンであるという、かようなチエンバレインの主張を確かめるべく、鳥居龍藏は、次のような体質の測定を沖縄の男女について試みた[47]。すなわち、ブロカ（Broca P.）が開発した皮膚色表[48]（Couleurs de la peau et du systeime pileax）を用いて、沖縄人たちの太陽光線に露出することが少ない上膊の上部の皮膚の色を計測したのであった。計測の対象に選ばれたのは首里の沖縄県師範学校および高等女学校に在籍する男女学生を中心とし、その他比較の意味で沖縄県に居住する他府県出身の14～19歳の女性であった[49]。

計測を実施した男子学生は合計146名で、出身地は、奄美大島、沖縄本島、宮古島、八重山本島などほぼ沖縄諸島全域にわたっていた。年齢は、17～24歳で主として中流階級出身者であった。このような階級の学生がとくに選ばれたのは、家外で労働することがほとんどないので、太陽光線に露出することが少ない。それ故、太陽の影響をあまり受けていないと看做されたからであった。一方、女子学生は、年齢13～19歳の78名で、同様の理由から上流階級出身者が選ばれた。この階級の出身者は、男子学生以上に皮膚を太陽に露出することが少ないので、計測には適した集団であった。

計測の結果、男子学生の場合皮膚は一見褐色にみえるが、それは太陽光線にされされたためであり、本来は黄色に近い色であると判明した。また女子学生についても同様で、皮膚は黄色を呈していることが分かり、互いの相違は認められなかった。さらに、比較対象とした他県出身の女子の皮膚も、沖縄の女子学生の場合と同一の色をしていることが分った。つまり、これらの計測の結果、沖縄人は、完全なモンゴリアンであることが証明された。かかる点も、筆者が度々指摘している鳥居龍藏の実証主義的な研究態度の表われといえよう[50]。

以上論じたように、現在の沖縄諸島の住民は、他の都府県出身の住民と同様に、すべてモンゴ

ロイドつまり蒙古人種に所属することが判明したのであるが、石器時代などの先住民族はどうであったのであろうか。既に紹介したように、人類学を専門とする恩師坪井正五郎の影響で、日本民族の起源に関しても関心を有していた鳥居龍藏にとっては、かかる問題は避けることができない課題であった。

鳥居龍藏は、かかる問題に関して、次のような独自の見解をもっていた。最初に、その見解から検討していくことにする[51]。無人島であった日本列島に最初に来島した集団はアイヌであった。現在でも、この集団が九州から北海道にまで石器時代の遺跡・遺物を残していることからもうかがわれる。しかしながら、石器時代のアイヌが、何処から日本列島に来島したかについては確実な定説がない。鳥居自身としては、朝鮮半島や満州（中国東北地区）でのフィールドサーヴェイなどから、これらの地域の有史以前の遺跡および遺物は、日本のものとはまったく異なっている。それ故、アイヌが朝鮮半島を経由して日本列島に渡来して来たとは考えられない、ということが断言できるとした。

さらに、アイヌは現在、北海道、樺太（サハリン）南部および千島列島に分布居住している。しかし、これらの集団は、後から入り込んできた我々日本人の祖先（鳥居の主張する「固有日本人」）のために駆逐されて、このように北方地域に居住することになっただけである。つまり、アイヌは、日本列島に来住後北方地域に進出したことが判明しているだけで、この集団が北方の大陸から日本列島に向って南下してきたという確証は、人類学および考古学上ないのである。なお、アイヌが、日本列島に移住してきた方向に関しては、南方の島々を経由して日本列島にたどりついたとする南方諸島説も存在するほどである。

それでは、日本の石器時代の遺物などを検討してみると、これらの遺物にあらわれている風俗に関しては、南方のものでは決してない。すなわち、土偶などに代表されるように東アジアの風俗、つまり寒冷地の風俗を示している。ただ、その額面などに入墨をしていることや、人肉を食用としているだけが、南方の風俗・習慣と関係しているといえるのみである。かように、日本列島の石器時代の先住民族の動向を大局的に論じた後、鳥居龍藏は具体的にアイヌを除外した日本民族の形成に大いに関与したと看做される民族集団として固有日本人・インドネジアン・インドシナ民族の3つの民族集団をあげている。

固有日本人は、日本民族の主要部を形成し、人数も多く、かつ分布範囲が比較的である。国津神と称されている古くからの土着の集団がこれに該当すると考えられるので、この集団を固有日本人と命名したのである。多くの研究者は、この集団が日本にやって来たのは金属器時代と考えている。しかし、鳥居は自身が朝鮮半島、満州、蒙古などの石器時代遺跡を調査した結果、わが国の弥生式土器を遺した集団が古代史でいう国津神であり、この集団すなわち固有日本人は、朝鮮半島経由で日本列島に来島したことが分った。その後、さらに金属器時代に同族が数回にわたり来島してきたと思われる。つまり、「古代日本の文化はこれら先来の石器使用の日本人と後来の金属器使用の同族と相合して漸次形成発達されたものであって、今日の古蹟を残したものはこれらの民族である。[52]」と結論づけた。

インドネジアンは、一般にマレー人種と称されている集団のことである。このマレー人種は固有マレーとインドネジアンに二分される。後者のインドネジアンは極めて始原的でボルネオ、セレベス、フィリピン、台湾などに居住している。日本民族の中にも、このインドネジアンの型がみられるという。しかも、日本人中に縮毛の人々が存在するが、それはネグリトー種族の

要素を示すものであり、インドネジアンの中にネグリート族の要素が混入しているからである。すなわち、インドネジアンは、純粋に日本に入ってきたのではなく、この事例のように、幾多の異民族の血を交えて日本列島にもたらされたものであろうと考えている。

さらに、銅鐸を遺した民族集団も日本民族の形成を考察する場合、考慮しなければならない。この集団は、インドシナ民族と総称される集団で、南中国に古くから住んでいるミャオ族などに代表される民族である[53]。つまり、かように、日本民族にも南中国における漢民族侵入以前の民族集団の血が少し混っているのではないか、と看做すわけである。以上を要約すると、日本の古代においてはこれらの民族集団が前後して日本列島に来島し、日本列島において融合統一されたといえよう。

では、沖縄諸島の先住民族に関してはどうであろうか。鳥居龍藏はフィールドサーヴェイの結果などを踏まえて、次のように結論づけた[54]。沖縄本島に伝わっている開国神話によれば、その祖先は、阿摩彌姑と称し、子孫はこれから出たものとされる。この阿摩彌姑を祖先とする集団（以下阿摩彌姑派と称す）は、既述のチエンバレインの見解などから日本内地人と親しい関連を有するものと看做すことができる。つまり、一方が固有日本人（いわゆる天孫派）となり、他方が阿摩彌姑派となったのである。

それでは次に、かかる阿摩彌姑派が沖縄に到達した当時、沖縄には先住民族が居住していたかどうかが問題となる。その解決の手がかりとなったのが、諸島内にみられる石器時代の遺跡である。その発掘の結果、沖縄本島から出土する石器時代の遺物は、近接している台湾とは関係なく、内地から出土した遺物と同一系統のものであることが判明した。しかも、相模・三河をはじめとして畿内・中国・九州の各地のものと同類であった。この事から、太古、沖縄も日本内地も同一の民族集団が居住していたことが推測できる。しかも、日本内地と同様、以前には既に一種の先住民族が存在していたことが知られている。その先住民族とはアイヌである。アイヌが、沖縄諸島にいたことは、アイヌ地名が存在したことや、奄美大島に多毛の集団が多数おり、この人々はアイヌ的体質をもっていると考えられることなどから、推定できるという。かかる点も、日本内地とまったく同様であると指摘する。

なお、八重山本島には、既に述べたようにアイヌの遺跡はみられず、固有日本人のものばかりである。この集団は、九州方面から古い時代にこの島に移動してきたものと看做される。

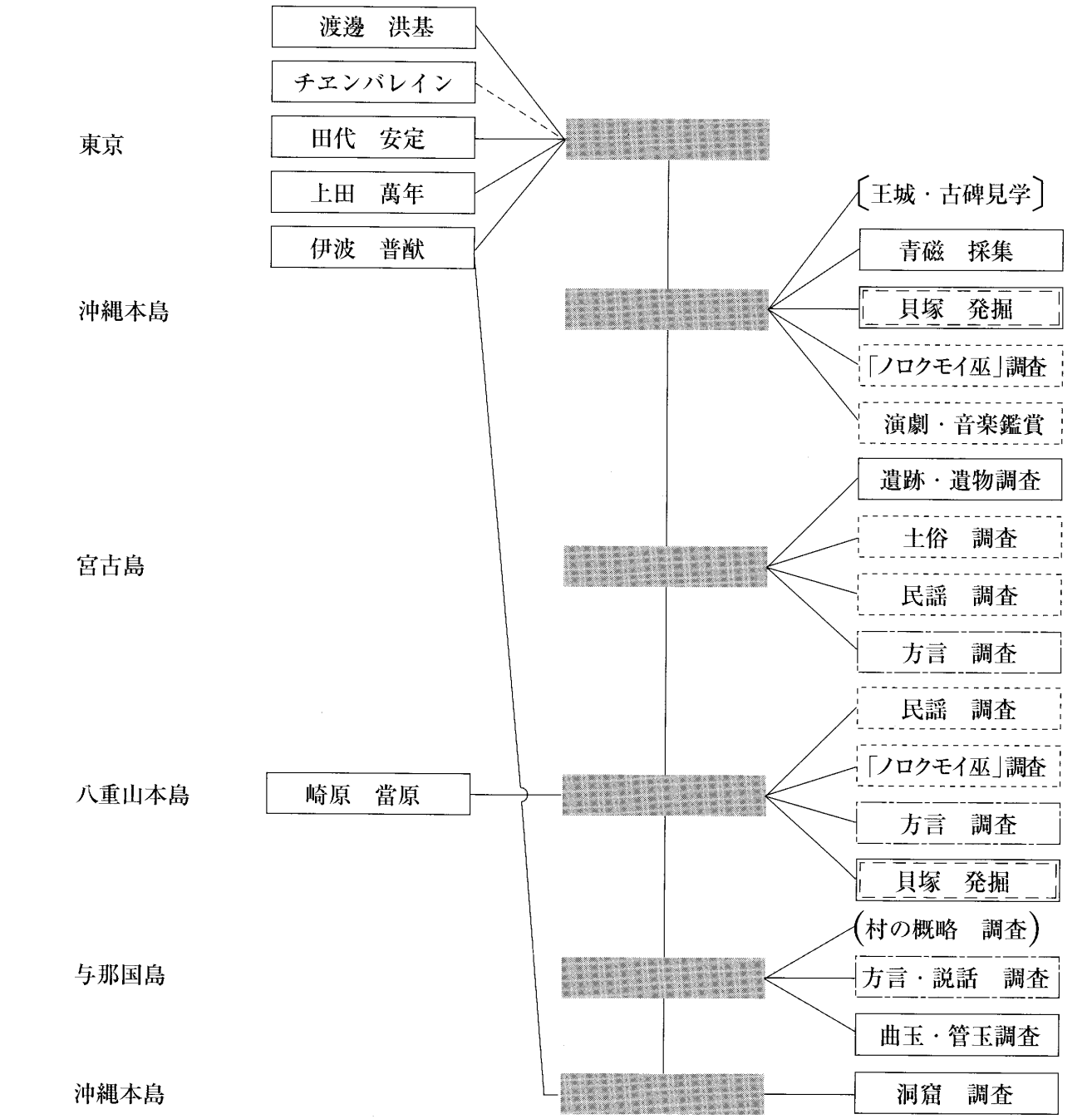
以上、鳥居龍藏の論点を整理すると、沖縄人は日本民族と同様に、満州・蒙古などから朝鮮半島経由でやって来た黄色人種の一派であると考えられるのである。

## 5. 結論

沖縄諸島のフィールドサーヴェイを通して、鳥居龍藏の研究の一端を分析・検討を重ねてきた。本文中で度々指摘したように、調査期間および訪問回数はともに少なく、決して満足のいく調査ではなかった、と推察できるが、鳥居が生涯をかけて追求してきた研究テーマ[55]の1つと看做される日本民族の起源に関して、新たな資料を付け加えることができたといえる。かかる意味から鳥居の沖縄諸島調査は成功裡に終了したものといえよう。

鳥居龍藏の沖縄調査に関する内容を、再度要約・展開する余裕がないが、本文中において論じたように、鳥居の学問に対する研究態度が非常に明確に示されているのが、今回の沖縄調査であったといえる。すなわち、沖縄調査を図式化すると第2図のようになる。

第2図　鳥居龍藏　沖縄調査（第2回）概要




〔出所〕
鳥居龍藏(1953), 鳥居龍藏(1976),『鳥居龍藏全集　第12巻』朝日新聞社
137～390ページ所収　226～230ページなどより作成

凡　例

直接助言・協力を受けた場合
間接的に助言・協力を受けた場合

〔　〕 歴史学
(　) 地理学
□ 考古学
民俗学（民俗芸能を含む）
人類学
言語学

この第2図からも明らかなように、現地に調査に出かける前に、東京において専門分野の諸先生や友人の助言・援助などを得て、出来るかぎりの情報を入手している。その場合、勿論日本人だけではなく、外国人研究者が著した書物にも眼を通すことを忘れていない。かような作業を行なうことで、事前にフィールドサーヴェイの中心課題を決定することができたのであった。この点こそが、鳥居龍藏のフィールドサーヴェイの大きな特徴ともいえる点で、国や地域の内外を問わず他地域の調査において共通するものであった。それ故、現地での短期間の日数であっても、当初の目的を達成できたといえる。

さらに、第2図にみられるように、フィールドサーヴェイを実施する場合、鳥居龍藏が専門とする人類学を主体に、考古学・民俗学（民俗芸能を含む）・言語学（方言など）など、関連諸分野の専門領域におよぶ学際的な立場から調査を行なっている。かかる点も、既に指摘したように、近年のわが国における学問分野における研究動向とは異なっているように思われる。すなわち、近年の研究動向を俯瞰してみれば、個々の学問分野内での細分化・専門化が急速に進展しているようにみうけられる。鳥居龍藏の研究態度はこの点に逆行しているようにみえる。しかしながら、とくに鳥居龍藏が目標としたフィールドサーヴェイを基礎とする地域研究を行なう場合、むしろ鳥居が実施したような意味での学際的研究の方が、より多大の成果をあげられる可能性があるのではないだろうか[56]。

以上論じたように、沖縄調査は、調査期間あるいは訪問日数がそれぞれ制限されたり、少なかったとはいえ、鳥居龍藏の典型的なフィールドサーヴェイの事例といえる。しかしながら、かように典型的なフィールドサーヴェイだといっても、問題点や疑問点がまったくないとはいえない。以下では、かかる点を指摘しておく。

鳥居龍藏の沖縄調査で問題となるのは、この点については、現時点からみれば鳥居のすべての調査・研究に共通していることであるが、その成果が時代的な制約を受けていることである。具体的にいえば、沖縄でのフィールドサーヴェイの中心課題であったこの地方の石器時代（現在では先史時代と一般に称されることが多い）に関する鳥居龍藏の見解、すなわち八重山諸島を除く沖縄諸島には、先住民族としてアイヌが居住し、その後弥生時代人とみらる「固有日本人」が朝鮮半島経由で南下し、この地にやって来たという学説は、完全に否定されてはいない[57]が、再考・検討を残している。また鳥居龍藏自身にしても、既に指摘したように、八重山本島の貝塚から出土した土器について、その製作様式が台湾の先住民と類似しているので、八重山本島の石器時代人は台湾の先住民族と関連していると看做している場合[58]もあれば、多くの日本内地人と同一すなわち「固有日本人」の分派である[59]としたこともあり、その立場が一定していない。かかる点は、それぞれ執筆された年代が異なることなどから、その後の研究成果を踏まえたものとも考えられるが、基本的には短期間のフィールドサーヴェイのみでは資料不足であったと推定できる。

かくして、鳥居龍藏は、沖縄調査終了後、引き続き国内各地での調査に従事するのは勿論のこと、満州・蒙古・朝鮮半島など東アジアの大陸部に度々出かけ、詳細なフィールドサーヴェイに従事する。つまり、沖縄調査以降、東アジアの大陸部での本格的なフィールドサーヴェイを実施することになる。そのとき、沖縄調査での中心課題であった、いわゆる「固有日本人」のルーツの解明が、鳥居龍藏の念頭に常におかれていた研究課題であったと想像できる。

沖縄調査は、日本列島周辺の国や地域を一通り調査した後の締め括りのフィールドサーヴェ

イと位置づけることができよう。

## 註

1）田畑久夫（1997）『民族学者　鳥居龍藏――アジア調査の軌跡――』古今書院

2）田畑久夫（1998・A）「鳥居龍藏と北千島――調査記録よりの分析――」昭和女子大学文化史研究創刊号　62～105ページ。

田畑久夫（1998・B）「鳥居龍藏の朝鮮半島調査――調査記録などの分析を通して――」昭和女子大学文化史研究2　32～62ページなど。

3）鳥居龍藏は、明治3年（1870）4月4日阿波国名東郡徳島船場町（現徳島県徳島市船場町一丁目二番地）で生まれ、昭和28年（1953）1月14日東京都において死去した。

鳥居龍次郎『鳥居龍藏小伝』、鳥居龍藏（1975）『鳥居龍藏全集　第1巻』朝日新聞社、1～12ページ所収。

4）かような特徴をもつ市民革命は、1848年の諸革命の挫折後終了したと一般的には看做されている。

5）それ故、次の著書に代表されるように、18世紀末に始った産業革命を工業化社会と前工業化社会、すなわち近代と前近代とに区分する分水嶺とする見解が一般的である。

角山榮（1975）『生活の世界歴史10　産業革命と民衆』河出書房新社　12ページなど。

6）一般に啓蒙思想家として著名なルソー（Jean-Jacques Rousseau　1712～78）が、ヨーロッパにおけるロマン的精神の興隆の先駆者であるとされる。すなわち、かかる点を補足すると、堀喜望が「土地の産物はかれら（未開民族のこと――筆者註）の自己保存の配慮にとって必要な補助を提供し、自然より賦与された憐憫の感情にしたがってかれらの道徳的情操は善良であった。ルソーは、社会状態と法律関係が、自然状態における人間の本性とは違った性質をかれらに要求するようになったというのである。」と論じていることなどからも知ることが可能である。

堀喜望（1954）『文化人類学』法律文化社、34ページ。

7）歴史学に関しては、厳密な歴史史料批判の方法と客観的歴史叙述を確立したとして高く評価されているランケ（Lepold von Ranke　1795－1886）が、民俗学においては、ドイツ民俗学の父と呼ばれるリール（Wilhelm Heinrich von Reihl　1823－97）がそれぞれの分野で代表される。

8）鳥居龍藏は、この期間毎年のように台湾の調査に従事した。しかし、明治32年（1899）のみは北千島調査を行なったため、台湾調査はできなかった。

9）第1回台湾調査は、明治29年（1896）夏季に、H氏（中島藤太郎）を随員として行なわれた。コースは、東京から宇品港（広島県）まで汽車で行き、そこから陸軍の御用船に便乗して基隆に上陸した。基隆からは列車で台湾総督府が設置されていた台北に向かい、総督府を表敬訪問した後、周辺の遺跡調査を試みた。そして、今回の調査の主目的である台湾東部の少数民族阿眉蕃（アミ族）を調査するため、花連に到着した。花連周辺の調査が終了すると再度基隆に引き返し、その後帰路沖縄に立ち寄ったのであった。

鳥居龍藏（1953）『ある老学徒の手記　考古学とともに六十年』朝日新聞社、鳥居龍藏（1976）『鳥居龍藏全集　第1・2巻』朝日新聞社　137～344ページ所収。189～192ページ。

10）このときの調査（第1回沖縄調査）に関しては、管見の範囲では、調査記録あるいは調査報告書の類は出版されていない。ただし、それ以前、鳥居龍藏が人類学教室の標本整理係であった当時、次の2論文を発表している。

鳥居龍藏（1894）「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」東京人類學會雑誌94、鳥居龍藏（1976）『鳥居龍藏全集　第4巻』朝日新聞社、250～251ページ所収。

鳥居龍藏（1895）「琉球諸島女子現用ノはけだま及び同地方掘出ノ曲玉」東京人類學會雑誌96、鳥居龍

藏（1976）『鳥居龍藏全集　第4巻』朝日新聞社、252～270ページ所収。

なお、鳥居龍藏は、沖縄でのフィールドサーヴェイを実施する以前に書かれた論文の題名では前述の2論文にみられるように、「琉球」という名称を使用している。しかし、フィールドサーヴェイ後に発表された論文の題名には、後述するように、すべて「沖縄」という名称で統一している。ただし、上記の両論文においても、論文中では「沖縄」という用語が使用されている。「沖縄」という名称は、慶長14年（1609）薩摩の島津氏によって征服されて以来、日本側で使用されてきた用語である。これにたいして、「琉球」という名称は、薩摩藩領として分割される以前からの名称であったが、これ以降は主として中国側が用いる用語となった。

かように、「沖縄」・「琉球」という名称には、それぞれ歴史的な経緯が存在する。そのため、使用する場合、各々の立場があると思われる。鳥居龍藏の場合も、実際にフィールドサーヴェイを行なった後には、「琉球」から「沖縄」へと論文の題名では名称を変更している。それ故、両者を各々使い分けしていると推定できるが、論文だけを分析・検討した結果では、かかる点は解明できなかった。本稿では、便宜上「沖縄」という名称で統一しておいた。

11）以下、本文の沖縄調査を実施するようになった理由は、主として晩年に執筆された自身の回想録などからの要約である。

前掲（9）鳥居龍藏（1953）、鳥居龍藏（1976）226～230ページ。

12）この用語は、前出の「蕃」などと同様、現在では差別を表現する言葉となっている。それ故、本来なら使用を慎むべき性質の用語であると考えている。しかしながら、本稿においては、鳥居龍藏が活躍した時代に論点をおいて分析・検討を行なっている。そのため、本稿中の地名などに関しては、原則として鳥居がその著作・論文などで使用している当時の名称で表記しておいた。

13）鳥居龍藏は、明治26年（1893）に東京帝國大學理科大學標本整理係の辞令を受けた。とはいっても、正式の大学職員ではなく、恩師坪井正五郎のポケットマネーで雇用された施設のポストであった。この辞令を受けて、坪井の人類学の講義を筆頭に、多くの先生方の講義を聴講することが可能となった。

前掲（9）鳥居龍藏（1953）、鳥居龍藏（1976）173ページ。

14）現在の民俗学に相当するものである。

15）後に両氏から送ってもらった資料を使って作成したのが、次の論攷である。

前掲（10）鳥居龍藏（1895）

16）鳥居龍藏の身分は、明治31年（1898）に東京帝國大學理科大學助手に任命され、正式に東京帝國大學の職員になった。

17）かかる点を多少補足すれば、周知のように、鳥居は海外での調査を行なう一方、国内調査も非常に積極的に行なってきた。ただ本文では、沖縄調査は日本列島の国内調査とは異なり、日本列島周辺地域の海外調査の一環として、それらの諸地域との比較の意味で実施されたものであるということを強調したのである。

18）一般には、チェンバレンと称されることが多い。イギリス人で、明治6年（1873）に来日、明治19年（1886）から明治23年（1890）年まで東京帝國大學博言学・国語学科教師を努めた。業績としては、言語学および国語学の研究方法をわが国に移植し、またアイヌ・琉球語と日本語を比較研究するなど、日本における国語研究の開拓者であった。離日後は、スイスのジュネーブに居住し、日本文学を数多く訳出して広く世界に紹介した。鳥居龍藏が最初にチエンバレンの著作を読んだのは、“The Luchu Island and their Inhabitants”であった。

19）鳥居龍藏（1904）「森山氏の琉球語のことに就て」東京人類學會雑誌222、前掲（10）鳥居龍藏（1976）625～628ページ所収。627～628ページ。

なお、鳥居は、チエンバレンの次のような大論文

も読破して、琉球語に関する知識を豊富に習得していた。Chamberlain, B.H. (1885) 'Essay in Aid of a Grammer and Dictionary of the Luchuan Language' 日本亜細亜協会報告23、1～272ページ。

20）旧制高校生だった19歳のとき、沖縄県尋常中学校校長の沖縄に対する差別発言に抗議するストライキを指導して退学処分を受けた。その後上京して東京帝國大學に入学した。

21）元琉球王族で、沖縄藩主であった。明治4年（1871）の廃藩置県により華族に列せられた。

22）前掲（10）鳥居龍藏（1895）

23）以下、本文の記述は次の論文からの要約である。

前掲（10）鳥居龍藏（1895）、鳥居龍藏（1976）『鳥居龍藏全集　第4巻』朝日新聞社、611～615ページ所収。

24）田代安定によれば、内地における「カ行」は、宮古島ではすべて「ハ行」の音として発音される習慣があるという。

前掲（10）鳥居龍藏（1895）、鳥居龍藏（1976）『鳥居龍藏全集　第４巻』朝日新聞社、612ページ。

25）なお、古代の「竹珠」は、竹管の間を1つあるいは2つおきに曲玉を付け、漸次その曲玉の数を減らしていったとされる。つまり、はじめは1つの「竹珠」に対し6個の曲玉を付けたが、それが5個になり、ついには1　個となった。しかしながら、このように竹管の間に曲玉をつけるという形のものは、現在では跡形もなくなってしまっているという。

前掲（10）鳥居龍藏（1895）、鳥居龍藏（1976）『鳥居龍藏全集　第４巻』朝日新聞社、612～613ページ。

26）前掲（1）田畑久夫（1998・B）52ページなど。

27）かように、ノロクモイに非常に関心を有したのは、田代安定が沖縄諸島の植物採集中において、人類学的調査も試み、「ノロクモイ巫」については既に『東京人類學會雑誌』などに、論攷として発表していた。その論攷などを既に鳥居龍藏が読んでいたことによると推察できる。

前掲（9）鳥居龍藏（1953）、鳥居龍藏（1976）『鳥居龍藏全集　第12巻』277ページ。

なお、当時、鳥居龍藏が使用していたカメラは、台湾調査においても使用したものと同じものであったと推定される。このカメラは現存していないが、キャビネ型のガラス乾板を用いるという初歩的なタイプであったと思われる。

28）具体的には那覇近郊の城嶽である。この貝塚は那覇市内を去ること数町で、一小丘陵上に位置している。現在では貝殻が散在するのみで、貝層をなしていないが、付近一帯では土器の破片・石器およびその原石などが出土する。

鳥居龍藏（1905）「沖縄本島に居住せしに就て」太陽11－1、なお、同名で同内容の論文が『考古界』4編8（1905）、『東京人類學會雑誌』227（1905）にも発表されている。前掲（3）鳥居龍藏（1975）、241～248ページ所収、244ページ。

29）このように、貝塚から出土する多種類の遺物の中で、土器に注目し、調査を実施したのは、次のような経緯があったからかも知れない。

すなわち、鳥居龍藏は沖縄調査を実施する以前に、首里より東上した西國男から沖縄に関する話を種々聞いていた。話によると、沖縄にも石器時代に住民が居住していたことが確実であった。また、そのとき、西がその証拠として持参した石斧をみたが、石垣島出土の石斧を除く他の八重山諸島の石斧はすべて片刃であって、内地の石斧と類似していないことが分った。つまり、かように、沖縄調査に出かける前に、鳥居はかなりの石器に関する知識をもっていたため、まだ未知の土器について、とくに関心を有したのではないか、と想像できる。

前掲（10）鳥居龍藏（1894）

30）薄手式は薄手派土器などとも称されるもので、鳥居龍藏が命名した。すなわち、鳥居は、アイヌの石器時代には、厚手・薄手・出奥の三様式が存在すると考えた。厚手派土器は、比較的焼き方が簡単で粗造であって、その多くは粘土中に雲母片岩を交え

ている。また意匠は雄大で壷・皿・鉢・甕などが多い。文様に関しても浮紋的なものが多い。分布は山間部が主体で、狩猟を生業とした集団が使用していたようである。これに対して、薄手派土器は、焼き方は厚手派土器よりも進歩し、文様は波紋が中心となっている。分布は太平洋岸の海岸地方が中心で、沖縄本島にまで伸びている。最後の出奥派土器は、仙台以北の奥羽地方に分布がみられる土器である。製法はかなり精巧で、美しい渦巻き模様を付けている。

つまり、本文でも後述するように、この貝塚などで発見された土器は、その後アイヌが製作したものであることを知ったのであった。

鳥居龍藏（1925）『有史以前の日本』磯部甲陽堂、前掲（28）鳥居龍藏（1975）167～453ページ所収。227～229ページ。

31）鳥居龍藏（1953）、前掲（9）鳥居龍藏（1976）228ページ。

32）貝塚の発見・調査地点は、中頭郡中城間切萩堂村の後銀岩、一名ウリグチ、同美里下切石川村チヌヒニチヤ、同具志川間切天顧村の城趾のフモト村の後、畑の中の3ヶ所であった（村名などは当時のまま）。これらの貝塚に共通している特色は、いずれも海に面した隆起さんご礁（Raised coralreef）の丘陵上に存在し、その丘陵の下は沖積層となっている点である。それ故、鳥居龍藏は、貝塚形成当時、丘陵下まで海水が来ていたと推定している。

鳥居龍藏（1905）、前掲（28）鳥居龍藏（1975）244ページ。

33）この島に鳥居龍藏と同郷の徳島県出身の人が来島して開墾を開始し、サトウキビを栽培している。しかし、マラリアが度々発生するため、鳥居が来島した当時は開墾を一時中止しているという状態であった。

鳥居龍藏（1953）、前掲（9）鳥居龍藏（1976）229ページ。

34）以下、八重山本島の貝塚を中心とする2ヶ所の遺跡に関しては、次の論攷によった。

鳥居龍藏（1905）「八重山の石器時代の住民に就て」太陽11－5、なお、同論文は、文語体の文章を口語体に訂正し、さらに結論部分を若干補足して、前掲（28）鳥居龍藏（1975）248～256に所収されている。

35）かかる「外耳土器」に対して、「内耳土器」あるいは「両耳土器」と称される土器が、北千島アイヌや樺太（サハリン）アイヌの遺跡から出土している。「内耳土器」は、主として鍋にみられ、土器の両側内部に各々耳を取り付けたものである。その使用法は、炊事などのとき、耳に帯紐を通し、これを竪穴内の天井から囲炉裏に向ってぶらさげ、肉などを入れて煮炊き用として用いられた。

鳥居龍藏（1901・A）「北千島に存在する石器時代遺跡・遺物は抑何種族の残せし者」東京人類學會雑誌187、鳥居龍藏（1976）『鳥居龍藏全集　第7巻』朝日新聞社、79～92ページ所収。

鳥居龍藏（1901・B）「北千島以外に内耳土器の種類は存在する乎」東京人類學會雑誌188、鳥居龍藏（1976）『鳥居龍藏全集　第7巻』朝日新聞社、92～95ページ所収。

鳥居龍藏（1904）「唐太島の内耳土器」東京人類學會雑誌220、鳥居龍藏（1976）『鳥居龍藏全集　第7巻』朝日新聞社、459～461ページ所収。

36）鳥居龍藏（1953）、前掲（9）鳥居龍藏（1976）229ページ。

37）それ故、八重山諸島に居住していた集団も、内地のアイヌ系の石器時代住民とは関係のない集団であると看做した。

鳥居龍藏（1905）、前掲（28）鳥居龍藏（1976）252ページ。

かかる点に関して、次章においても後述するか、鳥居龍藏は、石器時代においては内地ではアイヌの石器時代と我々の祖先（「固有日本人」と呼ぶ）の石器時代の2系統が存在したという立場をとっている。

38）鳥居龍藏（1953）、前掲（9）鳥居龍藏（1976）229ページ。

かかる鳥居の指摘を敷衍して考えれば、八重山諸島石器時代の住民は、台湾の先住民と同系統の住民であるかのような印象をうける。しかしながら、鳥居の次の論攷においては、「而して八重山の遺跡は我が先駆者の遺跡と同一であって、しかもその土器の形式はまさしく弥生系のものである。この事実からすれば、八重山の石器時代民衆は吾人の祖先と同一であって九州あたりから古く此処に移住して来たものであろう。」、と異なる見解を述べている。

鳥居龍藏（1905）、前掲（28）鳥居龍藏（1976）255ページ。

39）鳥居龍藏（1953）、前掲（9）鳥居龍藏（1976）229ページ。

40）鳥居龍藏（1905）前掲（28）鳥居龍藏（1976）244～255ページ。

なお、八重山諸島が沖縄本島の住民に知られるようになったのは比較的新しく、宮古島と共に、琉球王朝に朝貢したのは三山時代の中山王察度（14世紀初頭）のことであったとされる。

41）鳥居龍藏（1905）、前掲（28）鳥居龍藏（1976）255ページ。

42）先住民族を指す用語。第二次世界大戦前までは、かかる用語が使用されていたが、差別語として現在では使用されていない。なお、先住民族の中でも、教化されていない住民を生蕃、教化された住民を熟蕃と各々呼び区別していた。

43）かかる点は、現在では民俗芸能調査においては、踊りや仕草を動的に記録するためにも、ビデオカメラが必須の調査用具となっている。鳥居龍藏の調査時代にビデオカメラがあっれば、より早くそれを調査に取り入れたと思われる。

44）しかしながら、鳥居龍藏が民謡を蓄音機に収録したことは、人類学上きわめて興味ある先駆であるとされ、『東洋學藝雑誌』において、大いに賞賛されたという。

鳥居龍藏（1953）、前掲（9）鳥居龍藏（1976）230ページ。

45）前掲（2）田畑久夫（1998・A）81～90ページなど。

46）鳥居龍藏（1905）、前掲（28）鳥居龍藏（1975）243ページ。

47）鳥居龍藏（1904）「沖縄人の皮膚の色に就て」東京人類學會雑誌、223、前掲（10）鳥居龍藏（1976）616～625ページ所収。

48）皮膚色素は番号で表わされる。例えば、23号はやや赤みを帯びた黄色、24号は暗黒色をまじえた桜色というように、番号の数値が大きくなると暗黒色に近くなっている。なお、鳥居龍藏は、ブロカの“Instructions athrologiques generalees”を参照してこの計測を実施した。

鳥居龍藏（1964）、前掲（10）616ページ。

49）論文冒頭部分においては、その人数を77名、全員中流階級の出身者と記しているが、実際に計測したのは30名であった。

50）かように、主として外国人研究者がその著書などの中で論じた点を直ちに信用するのではなく、出来るかぎり、その内容が直接みられる現場に出向き、実際に確かめてから判断するという、実証主義的な研究態度が度々みられた。その例として、台湾の先住民族の一派が西南中国のミャオ族と類似しているというラクーペリー（de Lacouperie,T）の説をその著作で読み、それを確かめるために西南中国に出かけたことなどがあげられる。

前掲（1）田畑久夫（1997）43～82ページ。

51）鳥居龍藏の石器時代住民を中心とした日本民族の祖先に関する論攷は多数存在し、また著作の中でも度々自説を展開している。次の論文は、かかる鳥居龍藏の立場を短報では要領よく整理して論じているので、本稿では主としてこの論文を参照した。

鳥居龍藏（1911）「古代の日本民族移動発展の経路」歴史地理28－5、前掲（3）鳥居龍藏（1975）504～508ページ所収。

52）鳥居龍藏（1911）、前掲（3）鳥居龍藏（1975）505ページ。

53）ミャオ族に関しては、次の著者に代表されるように、現在では漢＝チベット語族、ミャオ・ヤオ語族系に所属させることが多い。

村松一弥（1973）『中国の少数民族――その歴史と文化および政治――』毎日新聞社。

54）鳥居龍藏（1905）、前掲（28）鳥居龍藏（1975）241～248ページ所収。

55）鳥居龍藏の学問的関心は多岐にわたったが、海外での調査に関しては、未完成に終ったが契丹すなわち遼の文化に関する研究、日本国内については、日本民族の起源を含めた広い意味での有史以前および上代の日本文化論であったといえる。後者の代表的な著作としては次のものがある。

鳥居龍藏（1925・A）『人類学上より見たる我が上代の文化（1）』叢文閣、前掲（28）鳥居龍藏（1975）13～166ページ所収。

鳥居龍藏（1925・B）『有史以前の日本』磯部甲陽堂、167～454ページ所収。

56）かかる点に関しては、雲貴高原を中心とする西南中国、あるいはベトナム北部の山岳地帯における少数民族に関するフィールドサーヴェイに従事している筆者にとっては、とくにそのような印象を強くもつ。なお、筆者のかかる方面での代表的な著作・論文としては、次のものがあげられる。

田畑久夫・金丸良子（1989）『中国雲貴高原の少数民族――ミャオ族・トン族』白帝社。

田畑久夫・金丸良子（1995）『中国少数民族誌　雲貴高原のヤオ族』ゆまに書房。

田畑久夫（1996）「中国雲貴高原の「高坡ミャオ」族の生活（1）――貴州省・従江県加勉郷別鳩村の場合――」昭和女子大学国際文化研究所紀要２、97～107ページ。

田畑久夫（1998）「「高坡ミャオ」族の生業形態――貴州省・従江県谷坪郷山崗村を事例として――」東アジア研究19、21～46ページ。

57）埴原和郎が主張する、日本先住民族は、東南系集団（縄文系）と北アジア系集団（渡来系）との二重構造をもつとする立場など、現在でも、鳥居龍藏に近い見解も存在する。

埴原和郎（1996）『日本人の誕生　人類はるかなる記録』（歴史文化ライブラリー1）吉川弘文館など。

58）鳥居龍藏（1953）、前掲（9）鳥居龍藏（1976）229ページ。

59）鳥居龍藏（1925・B）、前掲（1）鳥居龍藏（1975）225～256ページ。